第31回ベルマーク便りコンクール 入賞校を訪ねて

作業日の連絡やマークの集まり状況をはじめ、ベルマークをめぐる話題をＰＴＡ内で共有する「ベルマーク便り」。コンクール入賞校７校を訪ね、担当している皆さんに工夫や紙面に込めた思いを聞きました。

優秀賞　那覇市立小禄小学校

「関心もってほしくて」続けて10年

那覇市立小禄小学校（吉浜幸雅校長、児童446人）が6年連続でベルマーク便りコンクール優秀賞を受賞しました。

ＰＴＡベルマーク委員会は隣接する小禄幼稚園のＰＴＡとともに毎月第2水曜日に活動しています。仕事で参加できない人のため、土曜日に集まることもあります。委員長の赤嶺美奈子さんは「お子さんの学年がさまざまなので、良い情報交換の場になっています」と話します。

ベルマーク便りは委員長が作り、年度初めと夏休みを除いて毎月発行します。集まった点数の報告や、協賛会社の最新情報などを季節感のあるイラストとともに載せています。校内にカラーの大きなサイズを掲示して、児童の目に触れるようにもしています。

昨年度までベルマーク委員長を務めた真栄平京子さんは「全学年に冷水機を買うためにコンクールへの応募を始めました。目標は達成しましたが、もっと皆さんに関心を持って欲しくて、堅苦しくなく、かわいいお便りを目指してきました」と話します。

マークは、世帯ごとに専用封筒を配り、児童が各教室の回収箱に入れ、ベルマーク委員が集めて整理、集計します。封筒に受領スタンプと点数を記入する際に、お礼のメッセージを書く事もあります。時間はかかりますが、「わざわざベルマーク付き商品を買ったり、近所の人に協力してもらった」で、感謝の気持ちを伝えたい」と真栄平さんは言います。世の中全体が良くなって欲しい、という思いで、年間10万点前後の集票点数の中から今年度は、東日本大震災と熊本地震の被災地に約3万点ずつ寄贈しました。

近くのお店にカートリッジ回収を呼びかけたり、学校行事でベルマーク付き文具を校内販売したり、毎年新しい試みをして、10年にわたって小禄小のベルマーク活動を支えてきました。お子さんは中学生になりましたが、「ベルマークは私の生きがいです。これからも小禄小の活動が衰退しないように頑張って、命ある限り続けていきたい」と言います。

小禄小の可愛いイラストは、チラシから切り抜いたもの

旭町小学校に設置されているインクカートリッジの回収ボックス

優秀賞　松戸市立旭町小学校

写真と色使い工夫し報告とお願い

千葉県松戸市立旭町小学校（田中祥隆校長、児童602人）の保護者でつくる「旭っ子保護者の会」のベルマーク委員会（山内亜矢子委員長）が作る「ベルマーク通信」と掲示ポスターが、2度目の応募で優秀賞に選ばれました。

前委員長の水書（みずがき）美保さんが始めた、保護者用の配布物です。発行も不定期ですが、A4判1枚が児童を通して各家庭に配られます。

回収されたマーク、きれいに仕分けされたマーク、整理袋に入ったマークの写真が、横並びでセピア色の優しい色使いで紹介されています。写真の下には、累計点数が500万点を突破！　600万点、700万点と上を目指します。頑張ります。ご協力をお願いします、と報告に巧みにお願いを混ぜています。

ベルマークで購入した、学校名の入った黄色いテントの写真と持久走大会で保護者の受付本部に使われた写真を並べています。「こんなものも買えるんだ！」と報告し、紙面全体に読みやすい工夫が感じられます。ベルマーク委員会の活動日に、2階の廊下からよく見える中庭にテントを広げる予定です、と委員会の存在をアピールすることも抜かりはありません。

今、一番力を入れているのはテトラパックの回収です。

段ボール箱にブルーの画用紙で男の子の顔の回収箱を作り、ポスターで呼びかけ、1階の低学年児童用の入り口に設置しました。もちろん「ベルマーク通信」でも訴えました。

ピンクの画用紙を使って、目をハート型にした女の子の顔の回収箱も作り、ポスターはさらに目立つ色使いにして、2階の高学年、保護者用入り口に置きました。結果は大成功！　回収箱はいつもいっぱいになっています。

「水書さんと協力して児童に呼びかけるポスターも作りました。実際のマークをA4用紙2枚にびっしり貼って、その上に金色の折り紙で『あつめよう ベルマーク』と貼りました。これからも楽しみながらベルマーク活動を続けていきます」と山内さんは話しました。

優秀賞　目黒区立東根小学校

元気の出る記事書き創刊年に受賞

東京都目黒区立東根小学校（鈴木稔校長、692人）の「ひがしねベルマーク新聞」は創刊の年に優秀賞を射止めました。

第1号は子ども向け。文字は少なく、総ルビ付き、カラフル画像満載で、ベルマークの仕組みから商品紹介まで、楽しくシンプルにまとめました。大人向けの第2号は、たっぷり文字を使って、集票実績が倍増したことや、協力してくれた地域のお店へのお礼など、元気が出る記事をしっかり書き込みました。

1989年の運動参加以来、累計100万点以上を集めている東根小ですが、昨年から一層力を入れています。音頭を取ったのは、PTA運営部会計担当の下山陽子さんと田辺有加さんです。

「比較的点数が高く、効率がいい」と、目を付けたのがテトラパックでした。年3回の回収を常時回収に変更。保護者会で各クラスのベルマーク班員から、回収の方法などを説明してもらいました。下校してきた我が子から「給食の麦茶がテトラパックだった」と聞くと早速、学校に電話して「捨てないで！」。全校分約700個のパックを「救出」して、5人で開いて、切って、乾かしました。「ただ、小さいパックなので、手間の割に目方は稼げませんでした」と田辺さんは苦笑いします。それでも回収量は前年に比べて倍増し、手応えを感じています。

新宿会場のベルマーク説明会にも下山さんが初めて参加しました。「ウェブベルマークやベルマークだよりコンテストなど、いろんな情報を初めて知りました」。ひがしねベルマーク新聞も、この体験から生まれました。PTA会長さんは住区センターや近所のお店に協力をお願い。10月に開かれた地域イベント「東根フェスタ」には「ベルマーククイズ・コーナー」を出し、PTAのみなさん手作りの景品を持ち寄り、ベルマークを楽しくアピールしました。

「ベルマーク班は毎年抽選になるくらい人気の仕事。子どもたちにも運動をよく知ってもらい、物を大切にする心を育んでほしい」そのための新たなプランも着々、構想中だそうです。

▲和やかにマークの仕分けをする東根小PTAのみなさん

作業日には休憩時間に子どもたちも参加する常盤小▼

佳作　横須賀市立鴨居小学校

ズバリ「知ってほしい」を伝えたい

初めての応募で入賞しました。ペリーの黒船がやって来た神奈川県・浦賀にある横須賀市立鴨居小学校（新倉邦子校長、児童452人）です。

モノクロ、A4判1枚の簡素なつくり。PTAと地域向けを兼ね、回収の方法や回収箱を置いている校区内の場所、切り方などを説明します。最後に必ず付け加えるのが、「みなさまのちょっとした心がけが、1点1円につながります」。

PTAベルマーク委員会（杉山有紀子委員長）が出し、パソコン操作・編集は広報委員長の戎井（えびすい）七重さんらと力を合わせています。

「ベルマークだより」の狙いはズバリ、「知ってほしいと思うことを伝える」です。

というのも、杉山さん自身、ベルマーク運動説明会に出て初めて、運動の意義を理解したからです。「学校のモノを買うものと思ってましたが、それが自動的に、困っている他校への援助になることを知りました」。

その思いが、「今こそ知ってほしい　ベルマーク運動のほんとうのこと」と題した特別号の保存版発行につながりました。

「ほんとう①」に他校支援の仕組みを詳しく説明して、鴨居小も貢献していること、「②」はウェブベルマーク運動、「③」には、モノだけでなく講演会や教室もの開催にもベルマーク預金を使えることを伝えました。A3判カラーの圧巻です。

昨秋の運動会の前に、ミズノの「走り方教室」を開催し、3、4年生が体験しました。

戎井広報委員長によると、ベルマーク活動は「面倒くさい」という声もPTA内にも確かにあります。でも「こんなに大事なことなんだ、という共感を学校全体に広め、楽しく活動できるようにしたい」と話しています。

杉山さんも「子どもたちに豊かな体験や新しい用品を届け、支援が必要な学校にも笑顔が広がればいいですね」と強調しました。

そんな鴨居小。1963年に参加してから集めたベルマークの累計は、あと少しで600万点に達します。

佳作　大阪市立常盤小学校

蓄積に感謝し、新たな取り組みも

初入選した大阪市立常盤小学校（横田隆文校長、児童1156人）はJRや地下鉄の天王寺駅近くの文教地区にあります。

ベルマーク活動は、PTA学級委員長の八木菜穂子さん、二人の副委員長、図子真由美さんと吉岡由枝さんが中心です。強みは、歴代の委員長たちが役を退いた後も作業に集まってくれることです。

「ベルマーク通信」の題字にし、現在の形を定着させたのは、宮原祐基子さん。いま中学2年の次男が小学校3年の時に副委員長、翌年に委員長をつとめました。A4判1枚に、見出しと伝達事項を1、2行にまとめて、簡潔明瞭です。夏休みを除いて原則、毎月発行しています。

当時は作業日にも役員3人しか集まらなかったそうです。お茶を飲みに来てよ、30分でええから、買い物ついでにちょっと寄って、と声をかけ、一人、また一人と輪を広げてきました。

収集点数も3万点が6万点になると、欲が出ました。勤め先でもポスターを張り、ベルマーク付きのお菓子を食べている同僚を見つけると、「包み紙、あとでちょうだい」と声をかけたそうです。

「きょうはベルマークの作業日です。ベルマーク委員の人は手伝いに来てください」

昼休みに校内放送が流れると、勢いよく子どもたちが作業場の多目的室に駆け込んできます。

松本守隆先生が5年前に教務主任となり、「自分たちのことなので、子どもも参加させたい」というお母さんたちの考えに賛同してくれて、3年前には児童のベルマーク委員会が出来ました。

大規模校の強みもあり、マークは集まりますが、作業がなかなか追いつかないのが悩みです。昨年度の18万3541点は府内で4位、市内ではトップです。ネタ探しに悩んだ以前と違い、現在の担当者、吉岡さんは「話題が勝手に飛び込んでくる感じ」と、これまでの蓄積に感謝しています。

受賞を機に、原型を守りながらも題字の変更や、地域に収集箱を置いてもらうことも検討していて、「（正、副委員長）3人は燃えています」と張り切っています。

特別賞　愛媛県立しげのぶ特別支援学校

全県から集まり盛んな活動を展開

特別賞に選ばれた愛媛県立しげのぶ特別支援学校（喜安勝也校長、171人）は、児童・生徒数が少ないうえに居住地が全県に広がっています。PTAが集まるのも難しいなか、今年度から本格的に広報紙を作り始めました。

きっかけは松山市で6月にあったベルマーク運動説明会でした。

「ウェブベルマークで東北の被災地に支援を」「ベルマークの購入代金の10％が被災地支援に充てられている」という財団の説明に、PTAベルマーク担当の二宮みゆきさんは感心しました。一緒に参加したPTAの人たちに聞いても、「知らなかった」という答えばかり。「全校の児童・生徒、PTAにこのことを伝えたい」と広報紙作りを思い立ちました。

春と秋の2回、ベルマークの仕分け作業にPTAのベルマーク担当やボランティアら計約10人が学校に集まります。その際、事前に日時とボランティア募集のチラシを作って全校で配っていました。9月のお知らせには「ウェブベルマークのお知らせ」と書いたA4判の広報紙を用意しました。

ウェブベルマークの意義や利用方法、協賛会社の一覧などを載せました。仕分け作業の日時・場所を知らせる広報紙には「購入代金の10％が東日本大震災や熊本の被災地の子どもたちへの支援活動に充てられます」という一文も入れました。二宮さんがパソコンで作って、学校のプリンターで190枚を印刷し、全校に配りました。

「今回の受賞をきっかけにこれからも楽しく、役に立つベルマーク便りを作っていきたい」と二宮さんは言います。

しげのぶ特別支援学校は、肢体不自由と病弱な幼稚園児から高校生までが学んでいます。松山市の東隣の東温市にあり、PTA活動の際は、車で何時間もかけて学校にやって来る人もいます。それでも運動会や文化祭で模擬店を出したり、他校の授業参観をしたりとPTA活動は盛んです。

寄能志保PTA会長は「ベルマークなど色んな活動を通じてPTA同士が仲良くなれます」と話しています。

佳作　函館市立駒場小学校

こぐまの男の子が案内、毎年工夫

ベルマーク便り「こまべぇ通信」は、函館市立駒場小学校（三上清和校長、児童279人）で、PTA研修部の皆さんが発行しています。

こぐまの男の子「こまべぇ」が案内役をします。通信はモノクロ印刷で、太めの手書き文字とシンプルな図解が目に飛びこびます。パソコン編集で華やかな色刷りもある最近のベルマーク便りのなかで、かえって目立ちます。

編集する山形真紀子さんによると、市内のベルマーク先輩校、東山小学校PTAの皆さんに、手書きの親しみやすさを習ったといいます。

東山小は、2015年のベルマーク説明会・函館会場で、体験発表をされました。駒場小の皆さんはベルマーク活動を再開することを決めたばかりでした。教えを請いました。食事をしながら教わる機会を作ってくれたそうです。

函館に咲いたベルマークの輪ですね。

発行する頻度は、PTA行事との兼ね合いで変わります。昨年度は全校のベルマーク集めを6回やったので、お知らせと報告で計13回出しました。

毎年、工夫をこらします。

学校の近くに競馬場があるので、昨年度は各クラスに馬名をつけ、ベルマーク集めレースをしました。職員室も校長の名をもじって「カズチャンダイオー」で出走しましたが、奮いませんでした。先生たちが自分のクラスの収集箱にマークを入れたからです。

今年度は、校庭にある滑り台ほどの高さの「こまば山」が舞台です。ソリ遊びやスキー練習に使う遊び場で、ここへの登山を道のり3万キロと見立てて、目標3万点を集めます。通信で、こまべぇが何キロ登ったかを報告します。

昨年度は集めた点数で消しゴムをたくさん買い、ベルマーク再開記念として、全校生徒に配りました。今年はどう役立てるか、話しあっています。

PTA会長の本多依子（よりこ）さんは「この通信で、ベルマークへの意識が高まっています」と話しています。